

# 修 士 論 文 要 旨

学籍番号

21GH152

氏名 史 関心

人文社会科学 専攻 (コース: 文化芸術コース)

論文題目

谷崎潤一郎の作品における悪女像——『卍』を中心に

『卍』は、一九二八年三月から三〇年四月にかけて、谷崎潤一郎によって『改造』で連載された長編小説である。「卍」という図式を通じて、作中における複雑な男女四人の交錯する関係を象徴する。さらに、関西弁の使いと女性の同性愛という主題は、本作の特徴として、掲載されたときから絶えずに注目を集めている。

谷崎の『卍』について、従来、作品の言葉使い、いわゆる大阪言葉の表現に着目した研究が多くある。本作の連載に関して、紙面の分量に対する批判は同時代評でしばしば見られる。さらに、作中における女性関係を入り口として、谷崎の東京女性と関西女性についての捉え方を明らかにし、彼の関西趣味を検討したものは主流になった。近年の研究同行を見ると、作中における「私」という語り手と聞き手側の「先生」・「作者」という設定から、作品の多層的な構造を論じた研究は散見される。しかし、フェミニズムという角度から、『卍』における女性像と婚姻観に即した研究は十分ではないと言える。

そこで、本論文では、『卍』における園子と光子という女性の人物像を分析した上で、谷崎自らの恋愛経歴や婚姻生活を加え、昭和前期の恋愛・結婚についての変容を考察することを試みた。

本論は三部構成になる。

第一部分では、光子と園子の人物像における異同を掘り起こした。従来の家父長制の下での伝統的な婚姻の形式に抵抗する「新女性」の一面を明らかにした。その過程で、『卍』における複雑な男女関係をそれぞれ整理し、タイトルの「卍」によって象徴される「光子、園子、綿貫と園子の夫」という四人のやりとりを考察した。

第二部分では、大正末期と昭和前期の女性意識の台頭の流れを把握し、それを踏まえながら、谷崎自らの女性との関係、とりわけ彼の「女性趣味」を手がかりとして、『卍』を意味つけた。

第三部分では、フェミニズムに関する考察を加え、第一部分の光子と園子の人物像の特徴から、作中における悪女の本質を検討した。「悪女」の定義は、男性の権力に左右されるものであることを明らかにした。また、第二部分で触れたフェミニズム問題を引き続き、『卍』によって時代の婚姻観の変遷が見られることを指摘した。

以上の内容から、『卍』は、谷崎自らの婚姻に対する理解を作中に入れながら、執筆するとき、当時の大阪での上流階級の女性生活に基づき、「理想の女性」像を生産したものである。ただし、その「理想の女性」は、結婚を代表とする家父長制に反抗する進歩性があるが、実際に、男性・谷崎の恣意的な女性に対する妄想であると言える。